

みんなの認知症情報学会 第1回年次大会 CIHCD2018

1st Annual Conference of Citizen Informatics for Human Cognitive Disorder

みんなの心豊かな暮らしを創る認知症情報学
～当事者重視と人間中心のAI/IoTの利活用～

日 程

2018年 **9 / 1 (土) ・ 2 (日)**

会 場

静岡大学・浜松キャンパス 静岡県浜松市中区城北3-5-1

抄録集



The Society of Citizen Informatics
for Human Cognitive Disorder

一 般 社 団 法 人

みんなの
認知症
情報学会

ホームページ <https://cihcd.jp/>

〒432-8561

静岡県浜松市中区城北3-5-1

静岡大学イノベーション

社会連携推進機構216号室

E-mail: contact@cihcd.jp

電話: 053-424-5150

目次

ポスターセッション	1
A.暮らしを変えるイノベーション	1
B.認知症ケア教育のための学習環境の構築・ツール開発	1
C.医療・介護のサービス提供・連携のための情報共有、分析・評価	2
D.認知症、疾患・障害などを抱えてもその人らしく生活できるまちづくりとケア実践	3
E.急性期医療・プライマリ・ケア等におけるケアとサポート	3
F. 教育などのプログラムやセンターの取り組み、セラピーの実践	4
抄録集	5
No.5 認知症ケア現場の多職種共学を促進するマルチモーダル観察情報可視化ツール	5
南谷 拓光 ¹ , 柴田 健一 ^{1,2} , 石川 翔吾 ¹ , 桐山 伸也 ¹ , 玉井 顕 ³	
¹ 静岡大学 ² みんなの認知症情報学会 ³ 敦賀温泉病院	
No.6 改善可能な認知症の理解を促す見立て知協調学習環境の構築	6
吉沢 拓実 ¹ , 神谷 直輝 ¹ , 石川 翔吾 ¹ , 桐山 伸也 ^{1,4} , 上野 秀樹 ^{2,3,4} ,	
内田 直樹 ⁵ , 園田 薫 ^{5,6} , 西山 千秋 ⁷ , 村上 佑順 ⁷ , 柴田 健一 ^{1,4} , 竹林 洋一 ^{1,4}	
¹ 静岡大学 ² 千葉大学医学部附属病院 ³ 敦賀温泉病院 ⁴ みんなの認知症情報学会	
⁵ たろうクリニック ⁶ 藍野病院 ⁷ オレンジクロス	
No.7 認知症ケアにおける自己表現モデルに基づく協調学習環境デザイン	7
小俣 敦士 ¹ , 松井 佑樹 ¹ , 石川 翔吾 ¹ , 桐山 伸也 ^{1,5} , 宗形 初枝 ² , 中野目あゆみ ² ,	
香山 壮太 ² , 島野 光正 ² , 原 寿夫 ² , 坂根 裕 ³ , 本田 美和子 ⁴ , 竹林 洋一 ^{1, 5}	
¹ 静岡大学 ² 郡山市医療介護病院 ³ ExaWizards,inc. ⁴ 東京医療センター	
⁵ みんなの認知症情報学会	
No.8 認知症ケアコーチング支援のための Minsky の感情思考モデルに基づくケア知の表現	8
松井 佑樹 ¹ , 小俣 敦士 ¹ , 石川 翔吾 ¹ , 原 寿夫 ² , 宗形 初枝 ² , 中野目 あゆみ ² ,	
香山 壮太 ² , 島野 光正 ² , 桐山 伸也 ^{1,3} , 竹林 洋一 ^{1,3}	
¹ 静岡大学 ² 郡山市医療介護病院 ³ みんなの認知症情報学会	
No.10 認知症グループホームにおける SNS を活用した情報共有の事例	9
福田 賢一郎 ¹ , 太田 祐一 ¹ , 藤枝 朋子 ² , 西村 拓一 ¹	
¹ 産業技術総合研究所 人工知能研究センター	
² 株式会社ファミリーホーム グループホームもとうち	

No.11 直接介護行為の知識共有を目指して－ 介護の構造化マニュアルの例の公開	10
西村 悟史 ¹ , 趙 麗花 ¹ , 福田 賢一郎 ¹ , 西村 拓一 ¹	
¹ 産業技術総合研究所	
No.12 ナラティブに着目した日常生活動作の評価と支援	11
林 侑輝 ¹ , 阿部 明典 ^{2,3}	
¹ 千葉大学融合理工学府 ² 千葉大学文学部 ³ ドワンゴ人工知能研究所	
No.13 新しいサービス開発の設計方法論検討に向けたパーソンセンタードケア視点の体系的分析 ..	12
林 瑞恵 ¹ , 木村 篤信 ¹ , 草野 孔希 ¹ , 井原 雅行 ¹	
¹ NTT サービスエボリューション研究所	
No.14 生協10の基本ケアを用いたその人らしい暮らしを支えるケア標準化の実践	13
蓬萊谷 修久 ¹ , 江戸 義鷹 ¹	
¹ 福井県民生活協同組合 福祉事業部	
No.17 認知症のある人の生活環境デザインのためのあおいけあナレッジの抽出と構造化	14
寺面 美香 ¹ , 石川 翔吾 ¹ , 飯尾 えり子 ² , 小池 みゆき ² , 醍醐 真由美 ² , 井出 猛 ² , 加藤 忠相 ²	
¹ 静岡大学 ² あおいけあ	
No.18 認知症の人が自分の想いに沿った意思決定支援を受けるために！ ～その準備の提唱～ ...	15
石黒 秀喜 ^{1,2}	
¹ 老い支度普及センター ² 特定非営利活動法人地域ケア政策ネットワーク	
No.25 千葉大学履修証明プログラムによる社会人教育について	16
森川 裕美 ¹ , 上小澤 審 ² , 藤澤 陽子 ³ , 真原 仁 ³ , 小林 美亜 ³ , 上野 秀樹 ³ , 竹内 公一 ³	
¹ 社会福祉法人 三育ライフシャローム若葉 第2居宅介護支援事業所	
² 株式会社プレジャー ³ 千葉大学医学部附属病院	

ポスターセッション

■参加者の皆様は、見たい、聞きたい、知りたい、質問したい演題のブースに、自由に出入りすることができます。ポスターの前に演者がいますので、質問等を通じて、交流を図ってください。

*演題番号の前に※がついた演題は、抄録を掲載しています。

*演題番号の前に★がついた演題は、招待発表です。

■発表者は、指定された下記の時間中、必ずポスターの前で説明・討論を行ってください。

奇数演題番号 16:20 - 17:10

偶数演題番号 17:10 - 18:00

A.暮らしを変えるイノベーション

- ★ 1. 総合環境調整による自己認識の変化 –半径 5 kmの医・食・住のトータルサポートの実践–
金田ゆうじ¹, 花里まどか¹
¹株式会社 F.T.K
- ★ 2. 若者と高齢者が世代をこえて、元気でいきいきと暮らせる地域づくり -KAGUYA プロジェクト
宮崎誠¹
¹畿央大学
- ★ 3. アンダンチ：多世代交流と自由が紡ぐ「暮らしイノベーション」
軍司大輔¹
¹未来企画
- ★ 4. 鳥取県から発信 住民主体の認知症予防プログラム普及の取り組み
藤谷花津代¹
¹住民主体の認知症予防プログラム推進グループ・ワッショイ

B.認知症ケア教育のための学習環境の構築・ツール開発

- ※ 5. 認知症ケア現場の多職種共学を促進するマルチモーダル観察情報可視化ツール
南谷 拓光¹, 柴田 健一^{1,2}, 石川 翔吾¹, 桐山 伸也¹, 玉井 顕³
¹みんなの認知症情報学会 ²静岡大学 ³敦賀温泉病院
- ※ 6. 可能な認知症の理解を促す見立て知協調学習環境の構築改善
吉沢 拓実¹, 神谷 直輝¹, 石川 翔吾¹, 桐山 伸也^{1,4}, 上野 秀樹^{2,3,4},
内田 直樹⁵, 園田 薫^{5,6}, 西山 千秋⁷, 村上 佑順⁷, 柴田 健一^{1,4}, 竹林 洋一^{1,4}
¹静岡大学 ²千葉大学医学部附属病院 ³敦賀温泉病院 ⁴みんなの認知症情報学会
⁵たろうクリニック ⁶藍野病院 ⁷オレンジクロス

※ 7. 認知症ケアにおける自己表現モデルに基づく協調学習環境デザイン

小俣敦士¹, 松井佑樹¹, 石川翔吾¹, 桐山伸也^{1,5}, 宗形初枝², 中野目あゆみ², 香山壮太², 島野光正², 原寿夫², 坂根裕³, 本田美和子⁴, 竹林洋一^{1,5}

¹静岡大学 ²郡山市医療介護病院 ³ExaWizards,inc. ⁴東京医療センター

⁵みんなの認知症情報学会

※ 8. 認知症ケアコーチング支援のための Minsky の感情思考モデルに基づくケア知の表現

松井佑樹¹, 小俣敦士¹, 石川翔吾¹, 原寿夫², 宗形初枝², 中野目あゆみ², 香山壮太², 島野光正², 桐山伸也^{1,3}, 竹林洋一^{1,3}

¹静岡大学 ²郡山市医療介護病院 ³みんなの認知症情報学会

C.医療・介護のサービス提供・連携のための情報共有、分析・評価

★ 9. 医療・介護連携基盤システム SHACHIによる情報共有における同意・同意撤回の電子化について

相羽良寿¹, 伊丹秀剛¹, 能川琴子¹, 竹内公一¹

¹千葉大学医学部附属病院

※ 10. 認知症グループホームにおける SNS を活用した情報共有の事例

西村拓一¹, 福田 賢一郎¹, 太田祐一¹, 藤枝朋子²

¹産業技術総合研究所 人工知能研究センター ²ファミリーホーム グループホームもとうち

※ 11. 直接介護行為の知識共有を目指してー 介護の構造化マニュアルの例の公開

西村悟史¹, 趙麗花¹, 福田賢一郎¹, 西村拓一¹

¹産業技術総合研究所

※ 12. ナラティブに着目した日常生活動作の評価と支援

林侑輝¹, 阿部 明典^{2,3}

¹千葉大学融合理工学府 ²千葉大学文学部 ³ドワンゴ人工知能研究所

★ ※ 13. 新しいサービス開発の設計方法論検討に向けたパーソンセンタードケア視点の体系的分析

林瑞恵¹, 木村篤信¹, 草野孔希¹, 井原雅行¹

¹NTT サービスエボリューション研究所

D.認知症、疾患・障害などを抱えてもその人らしく生活できるまちづくりとケア実践

- ★※ 14. 生協10の基本ケアを用いたその人らしい暮らしを支えるケア標準化の実践
蓬萊谷修久¹, 江戸義鷹¹
¹福井県民生活協同組合 福祉事業部
- ★ 15. 社会を変えるつながりへ「認知症まちづくりプラットフォーム」
三浦亜希子¹
¹NPO 法人認知症フレンドシップクラブ
- ★ 16. それぞれの当たり前の生活の再構築と地域社会との接点を持てる居場所作り
太田悠貴¹
¹株式会社おおきに デイサービスおたがいさん
- ※ 17. 認知症のある人の生活環境デザインのためのあおいけあナレッジの抽出と構造化
寺面美香¹, 石川翔吾¹, 飯尾えり子², 小池みゆき², 醍醐真由美², 井出猛², 加藤忠相²
¹静岡大学 ²あおいけあ
- ★※ 18. 認知症の人が自分の想いに沿った意思決定支援を受けるために！ ～その準備の提唱～
石黒秀喜^{1,2}
¹老い支度普及センター ²特定非営利活動法人地域ケア政策ネットワーク

E.急性期医療・プライマリ・ケア等におけるケアとサポート

- ★ 19. 家庭医・総合診療医による認知症ケアの実践—プライマリ・ケア現場からの知
井上真智子^{1,2}, 阿部路子¹, 松田真和^{2,3}, 綱分信二^{2,3}
¹浜松医科大学 ²静岡家庭医養成プログラム ³菊川市家庭医療センター
- ★ 20. 認知症の人の非言語的メッセージに対する認識と行為化のもたらすもの
伊東美緒¹, 島田千穂¹
¹東京都健康長寿医療センター研究所
- ★ 21. 認知症高齢患者が安心して治療を受けられるために—認知症看護認定看護師の活動
池本理恵¹, 高田なおみ¹, 小林利彦¹
¹浜松医科大学医学部附属病院
- ★ 22. 急性期病院における入退院支援～住み慣れた地域で暮らすために～
高田なおみ¹, 小林利彦¹
¹浜松医科大学医学部附属病院

F. 教育などのプログラムやセンターの取り組み、セラピーの実践

★ 23. 「創造的リフレクション」を促す場の形成の研究

市川享子¹

¹東海大学

★ 24. 慢性痛患者から慢性痛を持つ人へ、集学的痛みセンターの取り組み

青野修一¹

¹愛知医科大学医学部

★※ 25. 千葉大学履修証明プログラムによる社会人教育について

森川裕美¹, 上小澤審², 藤澤陽子³, 真原仁³, 小林美亜³, 上野秀樹³, 竹内公一³

¹三育ライフ シャローム若葉 ²株式会社プレジャー

³千葉大学医学部附属病院

★ 26. 子どもの豊かな個性を重視した発達支援の実践 ～浜松市根洗学園のやったことないから やってみるそして"気づき"に気づくワークショッププログラム～

松本知子¹, 鈴木一郎太²

¹浜松市根洗学園 児童発達支援センター ²大と小とレフ

★ 27. 高齢者に対するアロマセラピーの実践 Aromatherapy for the Elderly

ケミリー 園子¹, 金田一敦子¹, 松崎優美¹, 森由美子¹, 清野恵理子¹, 平賀直美¹,
田中とも江², 桐山伸也³, 渡邊修治³, 竹林洋一³

¹IAA 国際アロマニスト協会 ²ケアホーム西大井こうほうえん ³静岡大学

抄録集

No.5 認知症ケア現場の多職種共学を促進するマルチモーダル観察情報可視化ツール

南谷 拓光¹, 柴田 健一^{1,2}, 石川 翔吾¹, 桐山 伸也¹, 玉井 顕³

¹静岡大学 ²みんなの認知症情報学会 ³敦賀温泉病院

本発表では認知症ケア高度化に向けて、認知症のある人の状況理解を深めるための情報可視化ツールについて述べる。発表者らは、介護スタッフが認知症のある人を多様な観点で観察して得られる観察情報に着目し、認知症のある人の状況理解に向けて、ケアの視点を共に学ぶための共学環境の構築を進めている。また、これまでの実践的研究により、敦賀温泉病院・玉井顕医師が認知症の診断や啓発のために40年かけて磨き上げてきた行動観察に基づく認知症評価方式 AOS(Action Observation Sheet; AOS)に多視点観察情報の概念を導入し、視点が異なる複数の観察者の主観を関係者間で共有および連携することで、ケア従事者が共に理解を深め、認知症のある人の状況理解深化につながることを示してきた。一方で、認知症のある人の個性を尊重したケアを実現するためには、認知症のある人自身だけでなく、多職種スタッフの専門性や個性、そして認知症のある人との関係性に応じた共学の重要性がわかってきた。

そこで、多職種スタッフの共学を促進するため、AOSによって得られた観察情報を活用して、本人の状態像の経年変化を表現するためのマルチモーダル観察情報可視化ツールを設計した。設計した可視化ツールの有効性を検証するために、デイケア利用者のケア方針を話し合うケースカンファレンスにおいてツールを導入し、利用者の状況理解にどのように貢献するのか予備的検討を行った。職種の異なる（看護師、介護福祉士、作業療法士、精神保健福祉士）4名のスタッフに対して従来型のカンファレンスによる議論と、ツールを活用したカンファレンスの両方を実施し、その結果を比較した。

デイケア施設の多職種スタッフおよび家族間の観察結果の違いや時間の経過に伴う経年変化の情報を可視化することで、スタッフと家族間の気づきの違いや介護負担度の変化を表現することが可能となり、その根拠について議論が発展した。家族とスタッフの症状に対する感じ方の違いだけでなく、デイケアでは把握しきれなかった認知症の症状の進行や、薬の副作用に対する考察などの気づきが生まれ、他の人のケアに対する考え方やスタッフによる家族への働きかけについての学びの促進に役立つことを示した。

なお、本研究は静岡大学倫理委員会の承認を得て実施された。

No.6 改善可能な認知症の理解を促す見立て知協調学習環境の構築

吉沢 拓実¹, 神谷 直輝¹, 石川 翔吾¹, 桐山 伸也^{1,4}, 上野 秀樹^{2,3,4},
内田 直樹⁵, 園田 薫^{5,6}, 西山 千秋⁷, 村上 佑順⁷, 柴田 健一^{1,4}, 竹林 洋一^{1,4}
¹静岡大学 ²千葉大学医学部附属病院 ³敦賀温泉病院 ⁴みんなの認知症情報学会
⁵たろうクリニック ⁶藍野病院 ⁷オレンジクロス

本発表では、認知症の状態を適切に判断し対応するための見立て能力の向上と見立て「知」の形式知化を実現するために、症例に基づいて多職種で協調的に認知症の見立てを学ぶことができる学習環境の構築について述べる。認知機能の低下をもたらす多数の原因疾患の可能性について分析することを認知症の見立てと呼ぶ。その中には、脳細胞は死滅しておらず、薬の副作用やうつ病、精神的なストレスなどが原因で認知機能が低下した改善可能な認知症がある。そのため、改善可能な認知症を適切に見立てることによって、適切な医療につなげることが可能となる。そこで、精神科医の暗黙知にとどまっている見立ての知識と未解明な側面の多い生活情報を統合するために、症例に基づいて見立てを学ぶ協調学習会の設計と、協調学習会で共創された知識や学習会の結果を蓄積する認知症見立てコーパスの構築を行ってきた。

本研究では、認知症見立てコーパスに基づき、見立てを学ぶ学習者の思考プロセスを可視化することで、講師が個人ごとに適切なアドバイスをし、学習会全体で理解が浅い部分を確認しながら改善可能な認知症の理解を促すことができる協調学習環境を構築した。学習者はタブレット端末を用いて学習会に参加し、症例に対する見立てを端末に入力する。入力された情報に対しワードスポッティングによる言語処理を行い、専門家の見立ての例と比較した学習者の見立て状況をツリー形式で可視化する。本研究で構築された見立て知協調学習環境によって、講師の学習会の進行をサポートすることが可能となり、学習者の理解を促すことが示唆された。なお、本研究は静岡大学倫理委員会の承認を得たうえで実施された。

No.7 認知症ケアにおける自己表現モデルに基づく協調学習環境デザイン

小俣 敦士¹, 松井 佑樹¹, 石川 翔吾¹, 桐山 伸也^{1,5}, 宗形 初枝²

中野目あゆみ², 香山 壮太², 島野 光正², 原 寿夫², 坂根 裕³,

本田 美和子⁴, 竹林 洋一^{1, 5}

¹静岡大学 ²郡山市医療介護病院 ³ExaWizards,inc. ⁴東京医療センター

⁵みんなの認知症情報学会

本発表では個性に基づくケアの実践に向けて、認知症高齢者の自己表現モデルに基づく協調学習環境デザインについて述べる。発表者らは、「認知症は個性である」と考え、人工知能学・情報学のアプローチから、認知症になっても笑顔で安心して暮らせる社会の実現を目指している。郡山市医療介護病院では、ケアの実践映像を用いた組織学習を進めており、認知症ケアの実践と学習のデータを継続的に収集できる環境を構築している。また、これまでの実践的研究により、映像を用いた協調学習がケアスタッフの認知症ケアスキル向上に繋がることを示してきた。一方で、認知症のある人と関係性を築き生活の自由を回復するためには、ケアスキルを向上させるだけでなく、認知症高齢者自身の個性や望みといった情報を元に、その人の「回復を目指す」支援について組織や地域全体で考えることが重要であることがわかってきた。

加齢とともに認知機能や身体機能は持続的に低下し、認知症の状態になると、環境の変化や心的状況などにより症状の状態は変化するが、その人の長年の人生で形成される生活歴や、他者との関係性、嗜好および嫌いなもの、欲求や目標などの自己に関する情報はケアに活用できる。そこで、認知症高齢者本人に関する様々な情報を元に、複数の観点からその人の自己を表現する自己表現モデルを設計した。そして、協調学習の枠組みの中で、個性情報の収集および自己表現モデルへの適用と実践を行った。その結果、自己表現モデルに基づく協調学習環境が認知症高齢者本人の生活を支援するために有用であることが示唆された。なお、本研究は静岡大学倫理委員会の承認を得て実施された。

No.8 認知症ケアコーチング支援のための Minsky の感情思考モデルに基づくケア知の表現

松井 佑樹¹ 小俣 敦士¹ 石川 翔吾¹ 原 寿夫² 宗形 初枝²

中野目 あゆみ² 香山 壮太² 島野 光正² 桐山 伸也^{1,3} 竹林 洋一^{1,3}

¹静岡大学 ²郡山市医療介護病院 ³みんなの認知症情報学会

本発表では、発展途上である認知症ケアの形式知化に向け、Minsky の心のモデルを活用してケアにおける思考プロセスを表現した結果について述べる。発表者らは Evidence-based care の実現に向けて、認知症ケアのエビデンスを作り、活用するためのプラットフォームの構築を進めている。これまでに、マルチモーダルコミュニケーション技法ユマニチュード®に着目し、見る、話す、触れる等の優しさを伝えるスキルの可視化を行い、郡山市医療介護病院内での実践的研究により、指導者のコーチングを支援できることを示した。しかし、認知症の多様な状況にどのようにスキルを使えばいいのか、という考え方についての検討は十分ではなかった。

ケアはある症状への対応という 1 対 1 の関係ではない。認知症の人の状態、行動の意図、利用すべき知識、感情の変化、ケア全体としてどういう意味をもつのか、などのさまざまな知識が統合された結果である。このような多様な知識を表現するために、事例映像に対して認知症ケア従事者が用いたスキルと、そのスキルを用いるに至った思考を Minsky の感情思考モデルに基づき構造化した。ケア従事者によって状況を捉え、どのスキルを選択するかに至った過程を表現する知識表現モデルを設計した。設計した知識表現モデルによって、ケア従事者のコーチングの思考プロセスが可視化され、認知症ケア高度化に寄与することが示唆された。なお、本研究は静岡大学倫理委員会の承認を得たうえで実施された。

No.10 認知症グループホームにおける SNS を活用した情報共有の事例

福田 賢一郎¹，太田 祐一¹，藤枝 朋子²，西村 拓一¹

¹産業技術総合研究所 人工知能研究センター

²株式会社ファミリーホーム グループホームもとうち

介護の職場では、慢性的に職員不足が続いており、職員の量と質の確保が課題である。

ここでは、産総研が開発した「気づき共有システム DANCE^{*}」を職員の情報共有ツールとして有効活用しているグループホームの事例を紹介する。このグループホームでは、3 年半に渡り月平均約 150 件のメッセージ（申し送り・業務連絡）を DANCE で発信し情報共有している。職員は入社時に DANCE を読んでから業務に就くことが習慣となっている。メッセージ毎に職員の既読未読状況が把握できるため、フォローが容易であり情報共有に有効である。

まず月別のメッセージ件数と入居者・職員における事象との関係について整理し、考察を試みた。次に、合計約 5,000 件の申し送りの内容を項目別に分類した結果、大別すると 4 つに分けられ、その割合は以下ようになった。（1）直接介護主体：約 42%（2）アセスメント（観察）主体：約 19%（3）間接業務：約 27%（4）施設業務：約 12%である。さらに、小項目に分類すると 45 項目となった。多い順番に（1）ご家族対応：約 15%、（2）受診・健診：約 11%、（3）朝礼申し送り：約 8%、（4）服薬：約 7%であった。

注目すべきは、5 番目に（5）業務改善・ルール：約 6%がランクされていたことである。この項目は、入居者の状態変化やインシデントに対する「気づき」をもとに対策として、新しいチェック表の提案、仕組みの改良、ルールの改善・徹底等に関する内容である。リーダークラスからの発信が多いものの、一般職員からの疑問や別な視点からのコメントや提案も増加しており、活発な議論が展開され働きやすい職場環境づくりに貢献していることが垣間見られる。

この成果は、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の委託業務の結果得られたものである。

参考文献

[1]福田賢一郎、太田祐一、藤枝朋子、西村拓一：介護者の思いを汲んだチームケアを支援する SNS 情報共有の導入と検証。サービス学会第 6 回国内大会，2018.

^{*}DANCE：Dynamic Action and kNowledge assistant for Collaborative sErvice fields の略称

No.11 直接介護行為の知識共有を目指して－介護の構造化マニュアルの例の公開

西村 悟史¹, 趙 麗花¹, 福田 賢一郎¹, 西村 拓一¹

¹産業技術総合研究所

高齢化の進展に伴い、日本の医療・介護コストは世界に先駆けて増大している[1]。同時に、介護施設の従業員の負担も増大している。

施設内の従業員間の知識を共有することで、手順を知らないことに起因するヒヤリハットの低減や従業員教育を効率化することを目的として、筆者らは、これまでに構造化マニュアルと呼ぶ介護業務を目的指向で構造化したものを構築してきた[2]。それらは主に、介護業務に関する基本的な手続き的知識の内、直接介護と呼ばれる業務 8 種類（排泄介助、入浴介助、移乗介助、移動介助、更衣介助、体位変換、口腔ケア、食事介助）である。

しかし、これまでに構築した構造化マニュアルは人が直接読むことを志向した図表的表現の側面が強く標準的な形式に則って計算機可読には記述されていなかった。そのため、情報抽出や検索時の際に、既存のデータベース管理システムや、その検索システム等のオープンなソフトウェアによる恩恵を受けることが出来なかった。

そこで、World Wide Web Consortium (W3C)により勧告されている Resource Description Framework (RDF)[3]という形式に沿って記述することとした[4]。今回、そのスキーマを見直し計算機可読な形式に変換した構造化マニュアルを「介護の構造化マニュアルの例」として公開した[5]ので、その概要について発表する。

謝辞

本研究の一部は、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の委託業務および、JSPS 科研費 16K16160 の助成を受けたものです。

参考文献

[1] 厚生労働省：平成 26 年度介護保険事業状況報告（年報）。

<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/14/index.html> (2018/07/31 accessed)

[2] 西村悟史, 毛利陽子, 山中泉, 中村美佳, 高山薫, 西村拓一：知識発現による社会福祉法人内の介護知識の統一。SIG-SWO-043-04, pp.1-6, 2017.

[3] World Wide Web Consortium Working Group: RDF 1.1 Primer.

<https://www.w3.org/TR/rdf11-primer/> (2018/07/31 accessed)

[4] 西村悟史, 趙麗花, 福田賢一郎, 西村拓一：介護業務マニュアルの RDF 化の試み。人工知能学会研究会資料, SIG-SWO-044-11, pp.1-4. , 2018.

[5] 介護の構造化マニュアルの例.

https://github.com/satoshinishimura2460/Example_of_structured_manuals_for_elderly_care (2018/07/31 accessed)

No.12 ナラティブに着目した日常生活動作の評価と支援

林 侑輝¹, 阿部 明典^{2,3}

¹千葉大学融合理工学府 ²千葉大学文学部 ³ドワンゴ人工知能研究所

身体機能回復が目的の医療リハビリに対し、機能維持の為に日常生活全般をリハビリと捉える生活リハビリという考え方がある。高齢期に活動量が減少すると、閉じこもりや認知機能低下を引き起こす恐れがある。本研究は、日常行動を支援し活動量増加と認知機能の維持・向上を目指すものである。本発表では手段的生活動作（IADL）の一つとして食料品の買い物行動を取り上げ、心理的な効果について述べ、支援の方法について提案する。IADL は日常行動の内でも知的で複雑な行動で、加齢に伴い基礎的生活動作よりも早く障害が発生しやすいので、認知症の早期発見においても評価のポイントとなる。本稿では食料品店における自然な買い物行動を観察して収集した会話に着目する。この会話においては、計画立案や商品の吟味に関する会話に加え、家族の好みや幼少期の体験まで及ぶものもあった。また外出が困難な高齢者も想定し、コンピュータ上の仮想店舗で買い物してもらう方法も行い、そこで収集した会話も同様に分析した。語りに着目することは、例えば認知症当事者にとっても周囲の人々にとっても重要であり、[三井, 15]はそのような語りを家族のケアや認知症の早期発見に応用できるかが課題と指摘している。また生活リハビリの観点からすると、自立した日常生活の実現には当事者を取り囲む人々の気づきも重要である。そこで、認知症の方とその家族に対するインタビューデータ[Dipex-Japan, 2017]に見られる、日常生活の中で当事者の些細な変化や違和感を捉えるような語りについても併せて発表予定である。尚本研究に関する実験は、事前に実験参加者の同意を得た上で実施された。また収集したデータは個人が特定されない形で利用した。

No.13 新しいサービス開発の設計方法論検討に向けたパーソンセンタードケア視点の体系的分析

林 瑞恵¹, 木村 篤信¹, 草野 孔希¹, 井原 雅行¹

¹NTT サービスエボリューション研究所

大牟田では、認知症になっても、どんな障害を抱えても、誰もが住み慣れた家や地域で安心して豊かに暮らし続けることができるよう、地域全体で認知症の理解を深め、認知症の人と家族を支える家族を支える街づくりを目指し、パーソンセンタードケアの概念を中心においた取り組みが産官民連携で進められている。我々は、大牟田の福祉現場での生活者のいきいきとした暮らしを支援するパーソンセンタードケアの哲学が、統合的な暮らしを良くするケア（福祉）だけではなく、統合的な暮らしを良くするサービス開発（産業）の方法論にも有効だと考え、大牟田の福祉で深められたパーソンセンタードケアの概念に基づいて、Well-being なサービス開発の支援を行うための設計方法論を検討している。

本検討では、企業のサービス開発に必要となる、地域生活者の統合的な暮らしに関する知識を得ることができると考え、地域生活者の生きがいのある暮らしの実現を支えている大牟田市の地域福祉の窓口（地域包括支援センター）と、そこに所属するソーシャルワーカーと連携して、「地域密着型リビングラボ」の検証を進めている。我々は、大牟田市のソーシャルワーカーのパーソンセンタードケアの視点に着目し、ソーシャルワーカーと共に、生活者の課題等の解釈と解決策の導き方を分析した。本発表では、我々が目指すパーソンセンタードの概念に基づくサービス開発の事例、及びパーソンセンタードケア視点で、生活者の暮らしを理解するフレームワークを、既存フレームワークとの比較に基づいて報告する。

No.14 生協10の基本ケアを用いたその人らしい暮らしを支えるケア標準化の実践

蓬萊谷 修久¹, 江戸 義鷹¹

¹福井県民生活協同組合 福祉事業部

本発表では、自法人が実践する生協10の基本ケアが、本人のできることを生かした生活につながり、地域の中でその人らしい暮らしの再現につながっているのかについて述べる。また、本人の力を引き出すための環境づくりの必要性和ケアを通して共に学び合う人づくりに10の基本ケアなどの共通言語が役立つこと、そして、今後の取り組みについて述べる。

法人では、生活不活発による身体機能の衰えや疾病などにより、自立した日常生活を営みにくくなっている要介護高齢者等に対し、介護保険事業を始めた2000年から「あなたらしさ いつまでも」を介護理念に、人として尊厳ある暮らしを支えるケアサービスの提供を推進しているが、介護職員の介護実務経験、介護観、職業観、人生観などが多様であるが故に、基本となる介護の考え方や方法が確立できていなかった。このことから現場ではケアのバラつきが生じ、介護人材が日常のケア実務を通して共に学びあえる教育システムづくりとケアサービスの専門化が課題となっていた。

厚生労働省が「2025年に向けた介護人材にかかる需給推計（確定値）について（平成27年6月24日プレスリリース）」で、2025年には、介護人材が全国で37.7万人、福井県で1,772人不足すると示されているが、今後、地域の介護需要に柔軟に対応するためにも介護人材の育成を効果的に進める教育システムの整備も課題である。

このことを踏まえ、奈良県にある生活協同組合（ならコープ）が設立した社会福祉法人 協同福祉会がケア実践で築き上げたケア指針「あすなら10の基本ケア」に倣い、「生協10の基本ケア」としてケア指針を導入し、尊厳あるケアの実践を行っている。

生協10の基本ケアは、日常生活で何かしらの支援が必要な状態になった人の人生に対して責任を持ち、その人らしい普通の暮らしを取り戻すことをトータルサポートしようとするケア指針である。指針テーマを「喜びの共有」とし、健康に暮らすための環境整備に始まりターミナルケアをすることまでを全10章に整理し、第1章から順番に進めるものとしている。基本的な考え方は、本人の持つ力を用いて日常生活上の行為をサポートすることであり、生活動作の主体は本人であることから、本人の意思や行動なくてはケアが始まらないものとしている。この生活行為を継続することによって、本人のできることの再現と自尊心の回復、やりたいことの実現から本人の生きがいのサポートまで行えるものと考えている。

教育システムとしての生協10の基本ケアは、要介護状態の人にかかわるすべての人の共通言語として設けており、各章のテーマを軸にケア方針などを話し合う際の指標としているが、指標を用いて誰もが同

じ水準のケアを提供できるようにするために、1) 本人のできることをどのような情報で取得する必要があるのか、2) 得た情報に対してどのような関わり方や環境づくり支援が必要なのか、3) ケアの工夫をどのような情報で共有するとよいのか、などの視点で事例を示しながら、本人が喜びを感じられるケアの標準化に向けて議論したい。

No.17 認知症のある人の生活環境デザインのためのあおいけあナレッジの抽出と構造化

寺面 美香¹, 石川 翔吾¹, 飯尾 えり子², 小池 みゆき², 醍醐 真由美²,
井出 猛², 加藤 忠相²

¹静岡大学 ²あおいけあ

本発表では、認知症のある人の Quality of Life (QOL) 向上に向けて、在宅を中心とした生活環境デザインに関する知を形式知化するための基礎的検討について述べる。小規模多機能型居宅介護施設を運営する「あおいけあ」では、高齢者を社会資源として考え、認知症のある人が活躍できる場を構築している。一方、認知症のある人が社会で役立つためには、日常生活の安定がなければ成り立たない。そこで本研究では、生活支援という視点からあおいけあにおける考え方を抽出し、構造化を行った。本研究は静岡大学倫理委員会の承認の下、実施した。

生活支援に対する考え方を抽出するため、あおいけあスタッフとともに、通所する高齢者の症例を対象とした検討会を実施し、1)通所初期の情報から A さんらしい生活を考える、2)1ヶ月間の支援の情報からその支援の意図を考える、3)今後の支援を考える、の三つのステップで検討した。得られた意見を KJ 法でグルーピングし、データ間の関係を表現するために構造化した。その結果、高齢者の生活状況、高齢者・家族・支援者の望み、高齢者・家族の不安、支援の内容、支援者が必要とする情報の視点が得られた。設計したモデルをツリーやベン図で可視化して各データの関係性を分析した。分析の結果、あおいけあでは高齢者が望む支援や抱えている不安以外に、人となりや趣味、生活歴といった個性を重視していることが明らかとなった。また、パーソナル情報は最初から得られるものではなく、関係性が構築されることによって徐々にできあがっていくことが分かった。日々の変動が大きい ADL に働きかけるのではなく、変動の小さい個人プロフィールが生活支援において有効であることが示唆された。

No.18 認知症の人が自分の想いに沿った意思決定支援を受けるために！ ～その準備の提唱～

石黒 秀喜^{1,2}

¹ 老い支度普及センター ² 特定非営利活動法人地域ケア政策ネットワーク

認知症の人のアシストの基本は、日常生活・社会生活における意思決定支援を、いかに適切に行うかということに尽きる。そのためには、認知症になったその人の想いを知る必要がある。

これまでの人生歴、プラスおよびマイナスの両面にわたるプライドに関するエピソード、その背景にある性格、行動傾向、趣味嗜好、価値観などに関する情報を、あらかじめ知っておくことが信頼関係を構築する第1歩である。そのことによって、はじめて本人の想いを汲んだうえでの、自己決定支援が可能になり得る。

一方、認知症の人をアシストする側の専門家の世界だけでいくら議論しても、本人の想い汲む情報が現になければ、適切な自己決定支援の実践といっても、実際には限界があると言わざるを得ない。自己決定支援に有用な個人情報、どのように支援者が得るかが課題となる。

人生100年と言われる時代を迎えた今日、介護保険の第1号被保険者は、みんな認知症予備軍と言っても過言ではない。義母の15年におよぶ認知症を伴った生活を観るなかで、今後は高齢者の一人ひとりが長生きリスクを自覚し、自分が齢を重ね認知症になった場合に備えた準備をしておくべきと痛感するに至る。

認知症になった本人が意思決定支援を適切に受けるため、あらかじめ準備すべき具体的な内容とは、パーソン・センタード・ケアの考え方に基づく個人史や性格などを文章化することと、人生の最終段階の事前指示書を作成することである。ポスター発表でそのサンプルを提供する。

No.25 千葉大学履修証明プログラムによる社会人教育について

森川 裕美¹, 上小澤 審², 藤澤 陽子³, 真原 仁³, 小林 美亜³,
上野 秀樹³, 竹内 公一³

¹社会福祉法人 三育ライフシャローム若葉 第2 居宅介護支援事業所

²株式会社プレジャー ³千葉大学医学部附属病院

千葉大学医学部附属病院では、社会人向けの学び直しの場として履修証明プログラムを開催している。現在開催している履修証明プログラムは、地域で療養する人を支える人材を育成する「地域療養設計管理者養成プログラム」ならびに研究開発する技術者と現場の医療・介護者をつなげるにより遠隔医療を推進する人物を育成する「遠隔医療マネジメントプログラム」である。

ここでは、特に「地域療養設計管理者養成プログラム」について発表を行う。

このプログラムは、医療・介護に関する知識・技術を多角的な立場から学習することが特徴である。テーマ（学部における科目に相当するもの）としては、「認知症」や「緩和ケア」など 基礎的な知識・技術を学ぶ基礎テーマ群、「スピリチュアルケア」などこころのケアのためのテーマ群、「体をつくる」など生活面を支えるためのテーマ群、「ファシリテーション」など地域を動かすためのテーマ群、「医療統計」など医療を見直すためのテーマ群の14のテーマからなる。このようなテーマを学習することにより、地域で療養する人を一人の人が支えるのではなく、地域を巻き込んで支えることができるようになることを目指している。

昨年度から始めた第1期では、16名の履修生があった。このうち120時間以上という講義に出席し9名が、履修修了をはたした。修了した人のなかには、この講義で学ぶ事によって得られた人脈を通して、新たに地域活動を開始した人もいる。

ここでは、このプログラムの詳しい取り組みやこのプログラムに参加した履修生についてなどを発表する。

なお、このプログラムは、履修生自体が積極的に学術的な場にも出ていけるよう医療統計などの講義も行っている。このようなこともあり、筆頭著者始め当日の発表は、主催者側でなく履修生が務める。